

# 校長先生の初恋物語

## 第19話 これが本当の足長君だったのか

たった一人になってしまい、足長君の本気のボールから必死ににげたとっくんの体力はげんかいがきていました。足は思うように動かず、よれよれです。でも、足長君のボールは、どんどん強くなっていきます。

足長君のボールをよけて、にげ回るのが大変になってきて、とっくんはついに足がもつれて、ドッジボールコートの中でころんでしまいました。しかも、ころんだ場所は、ボールを持った足長君のすぐ目の前です。「もう、これでおしまいだ。これで足長君に当てられてしまう。ぼくの負けだ……。あらめた。」もう立ち上がるのをやめて、足長君のきょうれつなボールがとんでくるのを待ちました。

足長君の、ボール、とんできませんでした。なぜとんでこないのか不思議に思いました。あきらめてながめていた青空から、足長君の方へと視線をうつしました。

足長君は、右手でボールを持ったまま、立っていました。転んだおれしているとっくんを当てることはかんたんなことです。でも、ボールを投げようとはしないで、こう言いました。

「とっくん、早く立てよ。たおれているとっくんをあてても、しょうがないだろ。おれと、真剣勝負するんだろ。早く立て、ちゃんとした勝負をしようぜ。」

足長君は、なんと、とっくんが立つのを待っていてくれるんです。いつもとっくんのことをばかにして、大きらいな足長君でしたが、とっくんと勝負を、足長君が真剣に考えてくれていたことが分かりました。そのことが、うれしくなりました。

「よし、もうにげない。足長君のボールがきても、よけない。取ってやるよ。」

とっくんはそう言った後、ゆっくり立ち



上がり、服のよごれをはらいしました。その間も、足長君はボールを投げずに待っていました。とっくんはその後、ドッジボールコートのはじまで、ゆっくり移動しました。足長君からは完全に背中を向けましたが、ボールはとんできませんでした。コートのはじまでくると、「よしっ。」と自分に気合いを入れて、足長君のいる方をふり返り、こしを落としてかまえました。

「さあ、足長君、決着をつけよう。いつでもこいっ。」

足長君はゆっくり大きくふりかぶりしました。すべての力をボールにこめて、「スーパーミラクルスペシャルサンダーファイヤー超本気ボール」を最後にとっくんに向かって投げるつもりです。

「とっくん、この一球で、おしまいだー。」

足長君は、全身の筋肉のすべてを使って、ボールを投げてきました。

「ゴゴゴゴー———ッ。」

空気を切りさきながら、ボールが向かってきました。だれも見ることがない、おそろしいボールでした。きんに君が、

「とっくん、あぶないだちよー。はげるだちよー。」

と言いました。よしこさんも、さすがにとっくんのことを心配して、

「とっくん、もういいから、にげてー。」

と言いました。ダンプさんはもう見てられません。

「ゴゴゴゴー———ッ。」

ボールはまっすぐとっくんに向かってきました。こんなすごいボール、顔に当たってしまったら、100パーセント鼻血ブー。でも、にげません。にげるどころか、とっくんはボールに向かっていきまっづく

勝負のゆくえはどうなるのか……。足長君のボールをとることができるのか……。それとも、とっくんは鼻血ブーなのか……。

## 次回予告

とっくんVS足長君 決着の時

